ずいそう

ある夫婦の軌跡
一枚のサムネイルスケッチ

藤　枝　靖　規

昭和14年，重雄は30歳の時，札幌・菊水に町工場を立ち上げた。

北海道内の工業高校を卒業し，道庁勤務を経て，モノづくりの仕事で独立したいという夢を実現した。時は戦争の真っただ中。照明弾用部品，高射砲弾用部品など軍需品の生産から始まった。創業直前に結婚した妻キリ子がそれ以降，長年にわたり，事業を側面から支え続けることになる。

昭和20年の終戦を境に状況は一変。生産は軍需品から民生品へと転換したが，戦後の混乱の中，しばらくは“何でも屋”的な仕事をこなすしかなかったという。

昭和26年，重雄が札幌工業高等学校を卒業後に勤務したことのある北海道庁土木部の先輩から，一枚のサムネイルスケッチが持ち込まれた。テトラポットという護岸工事に使用するコンクリート製の四脚ブロックである。その鋼製型枠を試作して欲しいということであった。

今日の利益を追求する経営者ならば，たった一枚のサムネイルスケッチで，しかも海のものとなるか山のものとなるか判らないような仕事にはなかなか手をださない。仕様書や図面があって，その指示通りに製造して，一定の利益を見込めることでなければ，引き受けないのが普通である。リスクが大きすぎるのである。

一枚のスケッチから，使用目的から用途，場所，条件を類推し，知恵を働かせ，試作モデルを繰り返し，それに伴う製作技術を開発し，現場での能率的作業までを含め，ゼロからスタートする仕事である。しかも成功したならば，数多く使ってもらえて生産もできるが，万が一，使用不可ともなれば試作など開発に関する諸々の経費はおろか，利益は見込めずマイナスとなってしまう。

「この仕事はお前にしかできない」という先輩の殺し文句と，ここ4～5年眠っていた技術者の技術開発魂がムクムクと頭をもたげ引き受けてしまうのである。“他人がやらないこと”への挑戦である。

それからは連日の昼夜のない開発作業が工場内で続くことになる。現在ならば，どこの海岸，どこの港でもごく当たり前に見ることのできるテトラポットであるが，当時はスケッチ一枚があるだけで，現物がある訳ではない。円柱形ならば単曲面であり，2本，3本の組み合わせならば簡単である。テトラポットは円錐形の複曲面である。なおかつ，円錐形が4本立体となって複雑な立体をなす。コンクリートが漏れることなく密着し，かつ作業ができるだけ簡単で能率よくできるような分割された型枠が必要である。諸々の作業がトライ・アンド・エラーの繰り返しで進行した。本来ならば官とか大企業の試験所や研究所など，利益や損失が直接的でないところで行われるべき製作技術開発創造作業なのである。それが小さな町工場の中で，技術者重雄を中心に若き工員達の手で行われるのであるから，周囲の者や妻キリ子はハラハラドキドキしながら見守っていた。

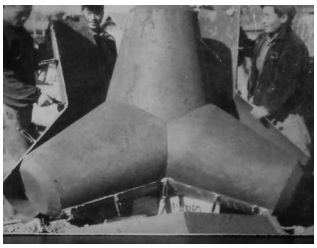
重雄本人は好きな研究開発のことであるから，寝る間も惜しんで工場で仕事をする。その熱意に圧倒された若き工員達も早く我が手で，我が目で試作の完成を見たく，工場にフトンを持ち込んで仕事をするようになる。妻キリ子の運び込む夜食のウドンや澱粉ダンゴ汁の大鍋を囲んで，重雄と工員達の談笑と作業の音が深夜の工場にあふれていた。そしてついに試作型枠の完成をみる。その試作品を囲んで，完成の酒盛りがあり，全員が感激の涙にむせんだという。

我が国最初のテトラポットの型枠誕生である。その後，数年にわたり，1トンから25トンといった用途別型枠が，協和機械製作所に開発者としての先駆者利益をもたらすこととなった。妻キリ子は道内各地を集金旅行し，着物の帯下に現金を巻き付け夜行列車で帰ってきたことも度々であったという。

昭和27年，前年試作に成功したテトラポット型枠が順調に生産体制に入りつつあった。そして技術者重雄は，次の新しい研究開発にエネルギーを注ぎつつあった。除雪装置の考案である。技術者重雄の雪に対する挑戦が始まるのである。考え始めた時，この仕事は，一生ものであると直感的に思ったという。

それから60余年になろうとする現在，研究開発製作された各種の除雪装置は，その用途や装着される機種，除雪目的，操作性など多くの問題と取り組みつつ年々改良が加えられて，協和機械製作所の中核となっているのである。

鋼製型枠



テトラポット

空港用高性能除雪車

――ふじえだ　やすのり　㈱協和機械製作所　代表取締役――